



本発表の趣旨

私たちは、日常生活において、メモを書いたり、メールを書いたり、といったように文字を書く活動を行っている。書くだけではなく、役所や学校に提出する書類を理解したり、薬や機械の説明書を読んで適切に使用するというような読む活動も求められる。このように日常生活を送るうえでは、日本語を書いたり読んだりすることが求められるが、困難を感じている人たちはいないのだろうか。日本人の識字率は、諸外国に比べて高いという説が広く信じられているため、日本には「よみかき」に関する問題はないと思う人も少なくないだろう。日本人のよみかき能力についての調査は、戦後実施されたが、それから数十年経過し社会は大きく変化している。本発表では、日本の「よみかき」にあらためて光をあて、社会の課題として考えてみたい。

日本の文字社会



図1 バスの車内の掲示 (発表者撮影)

日本の文字社会の大きな特徴は、漢字・平仮名・片仮名の3種類の文字が組み合わせて使われていることである。この漢字かな交じりの表記は、世界的に見ても複雑だと言われているが、学校教育を通じて浸透している。インバウンドや外国にルーツのある人たちの増加にともない、日本語以外の文字による表記も増えているものの、日常生活では漢字かな交じりの表記が圧倒的に多い。

日本人の識字率についての言説

日本語の表記が複雑にもかかわらず、日本人の識字率は高く、よみかきの問題はないという説も広く信じられている。そして、日本社会や日本近代史を論じる際に、日本語の優秀さとともに日本人の高い識字率が言及される傾向がある。

鈴木 (2017) は、多言語国家の社会不安や暴動の例を挙げ、日本語だけが使われる日本では言語の問題が政争につながらないと述べている。

また、木村 (2019) では、1960年代に海外で盛り上がった「日本近代化論」には、教育の普及や識字率の高さが日本の近代化や現代の科学技術発展の背景にあるという論調が多いことが指摘されている。

さらに、時代をさかのぼり、江戸時代においても識字率は世界一であったという主張も繰り返されている (かどや2011)。

このような「日本人の識字率は世界のなかでも特出して高い」という説は、アカデミズムだけではなく、ジャーナリズムでも取り上げられることがある。ときに政治家の発言にも現れ話題になる。その結果として、「日本人の高い識字率」は、あたりまえの「事実」として、日本人の意識に強固に植え付けられている。

参考文献

- かどやひでのり (2011) 「はじめにー「識字の社会言語学」の課題」かどやひでのり・あべやすし編『識字の社会言語学』生活書院、pp.13-24
木村政伸 (2019) 「民衆が文字を書き読む近世社会の特質ー文字社会の視点からー」『教育学研究』第86巻第4号、pp.485-496
鈴木孝夫 (2017) 『【増補新版】閉ざされた言語・日本語の世界』新潮社
角知行 (2011) 「識字率の神話ー日本人の読み書き能力調査」(一九四八)の再検証」かどやひでのり・あべやすし編『識字の社会言語学』生活書院、pp.159-199
角知行 (2012) 『識字神話を読みとくー「識字神話99%」の国・日本というイデオロギー』明石書店
読み書き能力調査委員会 (1951) 『日本人の読み書き能力』東京大学出版部
リチャード・ルビンジャー (2008) 『日本人のリテラシー』柏書店
<サイト> 総務省統計局「27N-Q03 各国の識字率」<<https://www.stat.go.jp/library/faq/faq27/faq27n03.html>> (2022年8月3日閲覧)
CIA The World Fact Book 「Literacy」<<https://www.cia.gov/the-world-factbook/field/literacy/>> (2022年8月3日閲覧)

日本人の識字率の内実

日本人の高い識字率の根拠はどこにあるのであろうか。国や地方公共団体における各種の施策の立案や推進に欠くことのできない基礎資料である統計を公開している総務相統計局のホームページには、「各国の識字率」という項目があり、国(地域)別の男女別の識字率を調べるために、ユネスコの統計がリンクされている。しかし、日本の識字率に関しては、「識字率は現在調査されていません」と明記されている。

各国の事情がまとめられているアメリカのCIA The World Fact Bookのサイトで識字率を調べてみると、日本のデータは示されていない。

また、日本近代化論などに見られる高識字率を就学率から推定する方法は、リチャード・ルビンジャー (2008) からそのあいまいさを指摘されている。

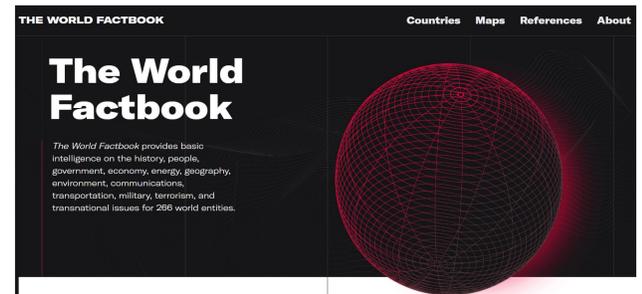


図2 CIA The World Fact Bookのサイト

「識字神話」の由来としての読み書き能力調査

日本人の高い識字率の根拠は極めて脆弱で、むしろ大衆化した「神話」と言えよう。角 (2011) では、識字神話の由来を「日本人の読み書き能力調査」に求めている。この調査は、1948年に実施された唯一の国家規模の識字調査で、全国の15歳から64歳までの日本人16820人が対象となった。調査の報告書には、非識字率が低いという仮説は成立するものの、literacy(正常な社会生活を営むために最低限必要な能力)を持つ者は6.2%に過ぎないと書かれている。この結論からは、低識字率、高識字率の2つの解釈が可能となり、その後後者の高識字率が主流となり、識字神話を強化することになった (角2011、2012)。

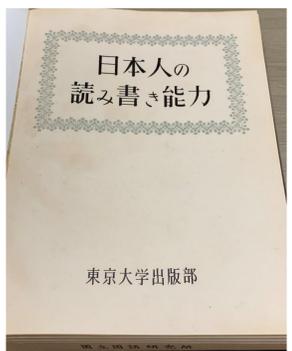


図3 報告書『日本人の読み書き能力』(国立国語研究所蔵本、発表者撮影)

まとめー社会問題としてのよみかき

識字神話により、日本は識字を意識することがなくなった。公式統計に識字率が報告されることなく、諸外国で重視されている成人基礎教育は必要ないものとみなされた。さらに重要なことは、1948年の調査では、障害者や外国にルーツのある人たちがあらかじめサンプリングから除外されたことである。しかし、こうした人たちは決して少数者ではなく、日本社会の構成員である。日本社会が多様化しているいま、識字神話を再検証し、潜在化するよみかき問題を社会の課題として向かい合う必要がある。